

高等学校

平成 10 年 度

# 教育研究員研究報告書

教育経営

東京都教育委員会

平成 10 年度

教育研究員名簿(教育経営)

No	学 区	学 校 名	氏 名
1	1	都立大森東高等学校	赤 松 輝 夫
2	3	都立練馬高等学校	幸 田 諭 昭
3	3	都立四谷商業高等学校	渡 邊 英 信
4	3	都立桜水商業高等学校	福 田 洋 三
5	4	都立志村高等学校	清 水 進
6	4	都立北豊島工業高等学校	田 丸 雅 夫
7	6	都立第三商業高等学校	荒 井 康 仁
8	7	都立山崎高等学校	牛 込 薫
9	8	都立拝島高等学校	大 田 原 弘 幸
10	8	都立武蔵村山東高等学校	柴 田 誠
11	9	都立東村山高等学校	山 本 信 行
12	10	都立府中高等学校	須 藤 淳

担 当 指 導 部 主任指導主事 菅 沢 茂  
指導部高等学校教育指導課 指 導 主 事 守 屋 一 幸

研究主題 教員一人一人の意識改革を通して  
「開かれた学校」づくりを推進する  
学校運営の在り方

目 次

I 主題の設定	
1 基本的な考え方 .....	2
2 研究内容 .....	2
3 「開かれた学校」づくりを推進するための学校運営の構造図 .....	3
4 「開かれた学校」づくりを推進する校内運営組織 .....	3
II 教員相互が開き合う学校づくりを推進する学校運営の工夫	
1 はじめに .....	4
2 「授業の公開及び参観」に関する教員の意識について .....	4
3 授業公開を中心とした校内研修の活性化に向けて .....	7
III 中学校と連携し、地域の人々に開かれた学校づくりを推進する学校運営の工夫	
1 はじめに .....	10
2 広報部の設置による授業公開の推進・充実 .....	10
3 能動的な授業公開を目指す「訪問授業」への展開 .....	11
IV 生徒に開かれた学校づくりを推進する学校運営の工夫	
1 はじめに .....	16
2 「生徒による授業評価」の作成と実施 .....	16
3 シラバスの作成と公開 .....	22
4 授業評価とシラバスによる教員の意識改革 .....	23
V まとめと今後の課題 .....	24

## I 主題の設定

### 1 基本的な考え方

今日、教育改革の推進については様々な提言がなされている。第15期中央教育審議会の答申及び教育課程審議会の答申では、これまでの学校教育を見直し、新しい時代に向けた学校教育の在り方が提言された。また東京都教育委員会においても平成9年12月に「都立学校等あり方検討委員会」が設置され、校長のリーダーシップの確立と「開かれた学校の推進」を中心とした学校改革の指針が示された。

このような答申や指針を踏まえ、学校改革を実現するためには、まず教員がそれぞれの能力や技能を最大限に発揮するとともに、一人一人が学校運営に参画しているという意識を強くもって教育活動に取り組むことが必要である。また、学校は、保護者や地域住民及び生徒等からの評価を厳しく受け止め、教育課程の改善・充実や学校運営に生かすなどして、学校を広く開かれたものとしなければならない。

そこで、平成10年度教育経営部会では、「教員一人一人の意識改革を通して開かれた学校づくりを推進する学校運営の在り方」を研究主題として設定した。

### 2 研究内容

「教員の意識改革の推進」の重要性及び開かれた学校づくりの方向性については、既に平成9年度の教育経営部会が「『生きる力』をはぐくむ教育を推進するための学校運営の在り方」の中で提言を行っている。そこで本年度はこの研究を引き継ぎ、教員の意識改革を通して、開かれた学校づくりを推進する学校運営の在り方を追究するとともに、その具体的な方策について、以下の三つの視点から提言を行うことを目指した。研究の推進に当たっては、できる限り実態調査や検証授業を行い、実践的な研究とすることを目指した。

なお、「学校運営連絡協議会」に関しては、平成10年度「東京の教育21」研究開発委員会の教育課題部会において研究開発を行ったので、本部会の研究対象とはしなかった。

#### (1) 教員相互が開き合う学校づくりを推進する学校運営の工夫

開かれた学校づくりを推進するためには、まず教員が互いに教育実践を公開し合い、常に交流ができるよう学校運営を工夫する必要がある。特に高等学校においては、教員がそれぞれの専門性の枠を越えて積極的に授業を公開し合うことが大切である。ここでは、教員が授業公開を行う際の阻害要因に着目し、学校の実態に応じた「授業公開の充実・定着のプロセス」と校内研修の企画立案のための校内組織の運用例等を示した。

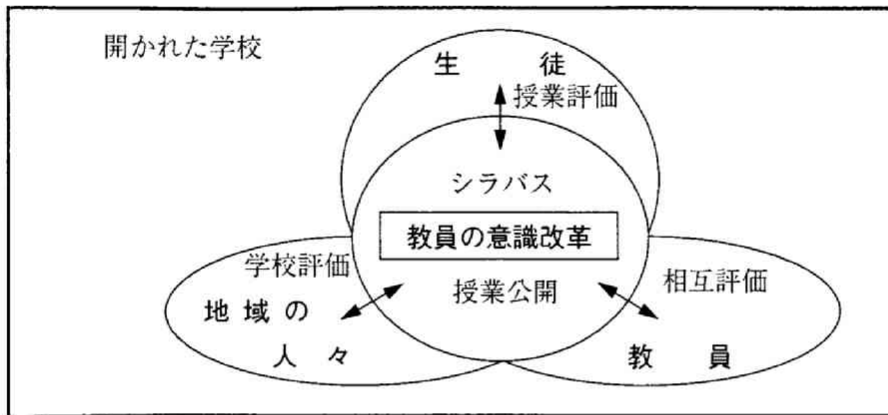
#### (2) 中学校と連携し、地域の人々に開かれた学校づくりを推進する学校運営の工夫

地域の人々に開かれた学校の推進については、従来から学校行事の公開、学校開放、公開講座等により進められ、保護者参観や中学生対象の一日体験入学、学校説明会に合わせた授業公開等も実施されてきた。ここでは、広報部の設置による組織的な授業公開の推進策と、より能動的な公開を目指す「訪問授業」への展開例を示した。

#### (3) 生徒に開かれた学校づくりを推進する学校運営の工夫

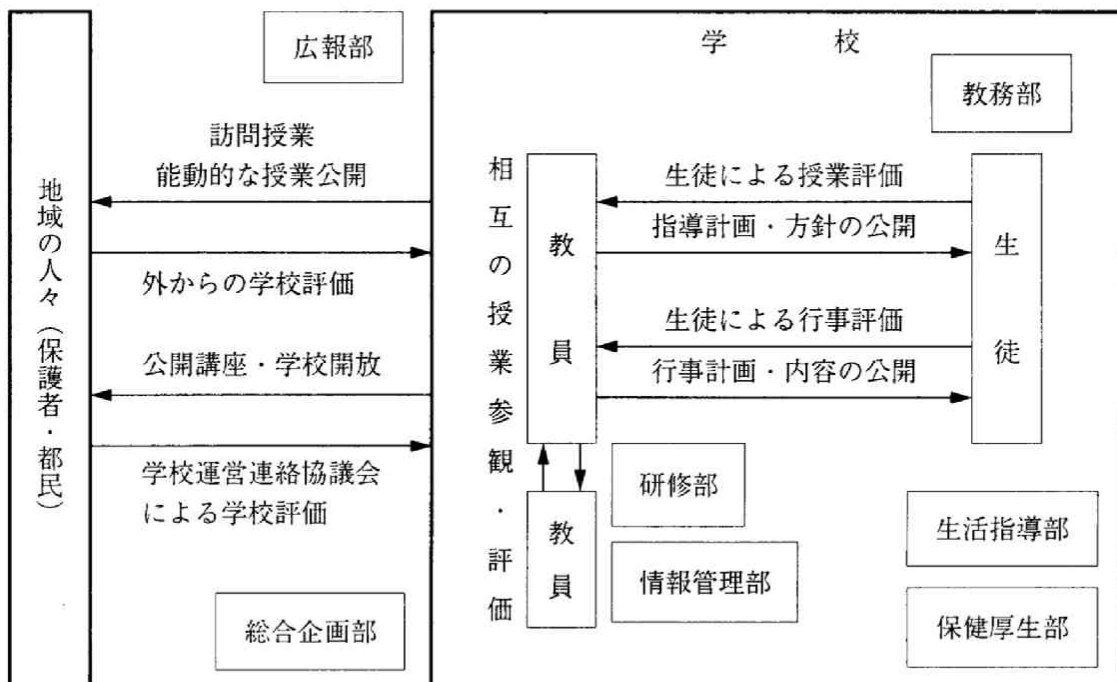
生徒にとって開かれた学校とは学習活動や学校生活が充実したものとなるよう自分の意見が反映されたり適切な情報提供が行われたりする場である。しかし従来、教員は授業に関する生徒の多様な要望を正確に把握し十分に伝えてこなかった点が多い。ここでは、授業改善の一つの方法として生徒による授業評価とシラバスの改善への方策を示した。

3 「開かれた学校」づくりを推進するための学校運営の構造図



4 「開かれた学校」づくりを推進する校内運営組織

(1) 「開かれた学校」づくりを推進するための校内運営組織図



(2) 各部の主な働き

研 修 部：各部・各学年等の課題を調査し、教員相互の授業公開などによる各種校内研修の企画・運営等を行い、教員の資質・技能の向上を推進する。

広 報 部：中学校への訪問授業、体験入学、学校説明会及び授業公開等の企画・運営を行い、都立高校の教育活動及び学校情報のPR活動を推進する。

総合企画部：生徒・保護者からの評価・要望を把握するとともに学校運営連絡協議会等を通して地域社会との連携を図りながら、長期的な視野に立って学校の将来像の総合的研究を推進する。

情報管理部：各部署における情報の整理及び管理を行うことにより校内組織の円滑な運営を推進する。

総 合 部：学校規模に応じて、広報部、総合企画部、情報管理部を一つの部としてまとめ、各部の役割を推進する。

## Ⅱ 教員相互が開き合う学校づくりを推進する学校運営の工夫

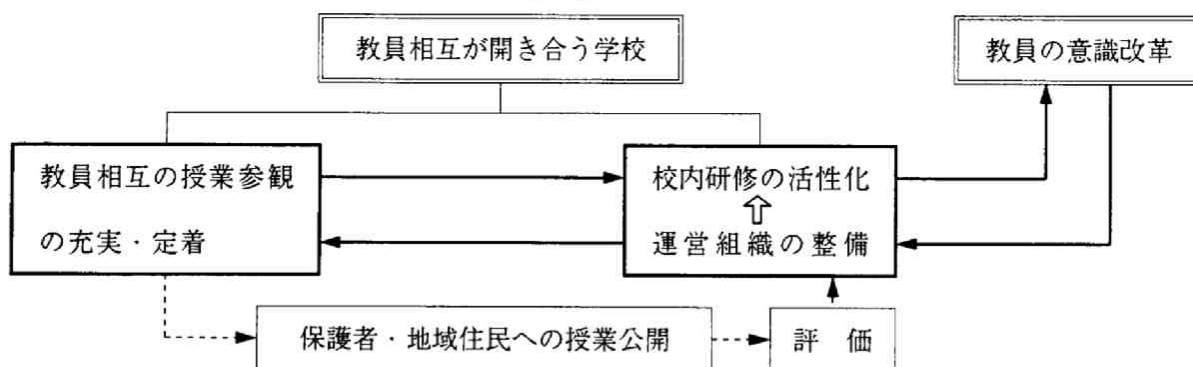
### 1 はじめに

「開かれた学校」づくりを推進する学校運営には、まず教員同士が互いに開き合う状態にあることが必要となる。すなわち、教員が互いに授業を公開し合い、課題解決に向けて率直に意見を交換し合う場を校内において設定することが大切である。

そこで本部会では、「教員相互の授業参観」と「校内研修」とに着目し、これらを組織的・計画的に行うことによって、高等学校ではあまり行われてこなかった「授業参観や授業公開を中心とした校内研修」の充実・定着を図る方策について、教員の意識改革と開かれた学校づくりの観点から追究することとした。

研究の推進に当たっては、まず授業の公開及び観察に関する教員の意識を調査し、その結果を踏まえて教員相互の授業参観の充実・定着のための方策について考察するとともに、授業の公開や参観を中心に校内研修を活性化させるための校内組織の運営方法や研修導入のプロセスについて例示した。なお、授業公開に関する教員の意識調査の結果から、教員相互の授業参観と保護者・地域住民への授業公開を同時に行うことも有意義であると考え、保護者や地域の人々への授業公開についてもこのプロセスに位置付けている。

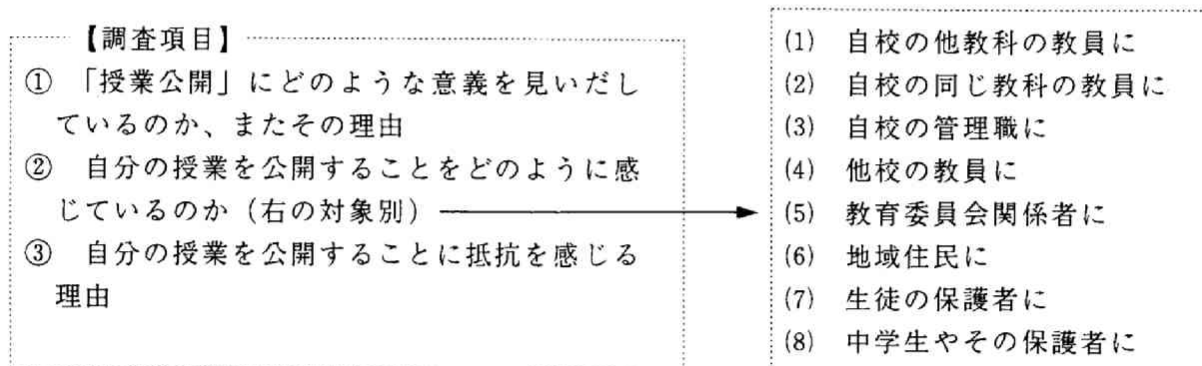
以上の概要は、下図に示すとおりである。



### 2 授業の公開及び参観に関する教員の意識について

#### (1) アンケート調査の実施

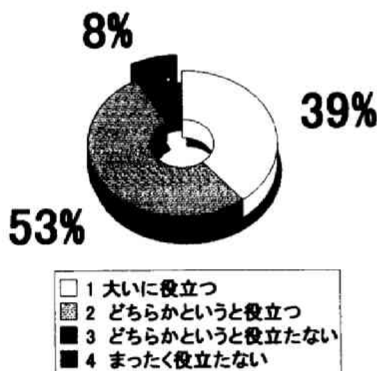
自分の授業を公開することや、他の教員の授業を参観することをどのように感じているか、教育研究員の所属校の教員（76名）に対してアンケート調査を実施した。



## (2) 調査結果とその考察

【グラフ1】

授業を参観したり参観されたりすることをどう思いますか



授業を参観したり参観されたりすることについて意識を問う項目については、左の【グラフ1】に見るように、「まったく役立つ」とする回答はなかった。「大いに役立つ」という回答が39%、「どちらかという役立つ」が53%であり、肯定的な回答は92%であった。

9割以上が、授業の参観をすることや授業の参観をされることに何らかの意義を見だし、効果を期待していることが分かる。

では、教員は授業参観をしたりされたりすることによってどのような意義や効果を考えているのであろうか。

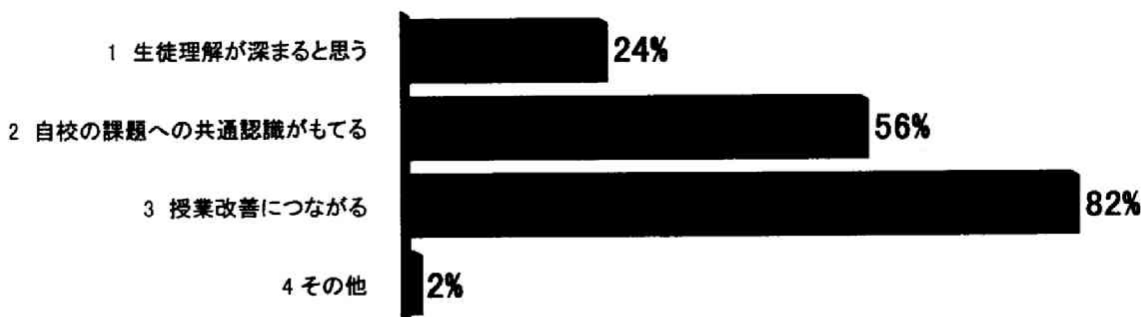
このことについては、下の【グラフ2】を参照して

いただきたい。教員相互の授業参観が「役立つ」と回答した教員に、その理由について質問したところ、最も多かったのが「授業改善につながる」という回答で82%であった。次いで「自校の課題への共通理解がもてる」が56%、「生徒理解が深まる」が24%であった。

複数回答であるので重複はあるものの、授業の参観や公開の意義や効果についても明確に意識していることが分かる。これらの結果からは、多くの教員が自らの授業や自校の課題についての共通認識、生徒理解の深化等について、一層の改善を望んでいる状況がうかがえる。

【グラフ2】

### 授業公開が役立つ理由



以上、【グラフ1】【グラフ2】に示した調査結果からは、多くの教員が、授業を参観したり公開したりすることに関して具体的に意義や効果を認識していることが分かる。

ところが現状では、授業の参観や公開はほとんどの都立高等学校において定着している状況にあるとは言いがたい。そこで、「授業を公開することに抵抗を感じる理由」について質問したのが、次ページの【グラフ3】である。

「授業を公開することに抵抗を感じる理由」として最も多かったのが、「自分を評価されるようで気が進まない」という理由で、60%であった。さらにその理由を聞き取ったところ、授業を公開することの目的や参観者の評価の観点が明らかでないために強い抵抗感が生じるというものが多かった。

次に「他の教師の参考になるような実践はしていない」という理由が48%で、他教科の教員はもちろん同一教科であっても、それぞれの教員の専門性や特色を尊重したいとするものであった。

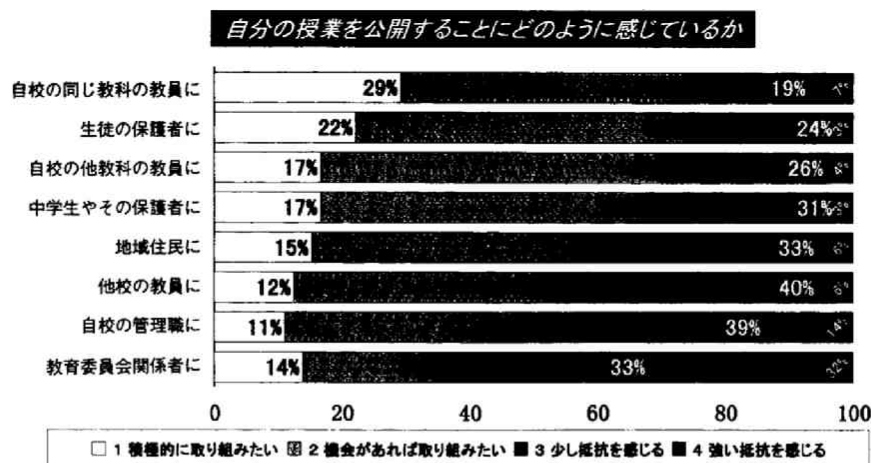
次いで「生徒の学習態度に問題がある」が24%、「準備に時間がかかる」が、22%であった。

最後に、授業公開の対象者別に、自分の授業を公開することの意識を問うた結果が下の【グラフ4】である。授業を公開することに意欲的になりうる対象としては、「生徒の保護者」と「自校の同じ教科の教師」が最も多くともに73%、「自校の他教科の教師」が70%でこれらに次いでいる。また、「中学生やその保護者」は67%、「地域住民」も61%でともに6割を越えている。いずれも「機会があれば取り組みたい」という回答が50%前後であるから、まず、こうした対象についての授業公開の機会を設けることが重要である。

【グラフ3】



【グラフ4】



以上の調査結果から、授業公開を中心に校内研修を活性化するためには、次のような課題を解決する必要があると考える。

- (1) 校内研修を企画運営する校内組織を作ること
- (2) 授業の公開及び校内研修の目的を明確にすること
- (3) 研究授業等を行う際には、参観や評価の観点を授業者が示せるようにすること
- (4) 授業の参観や公開のための準備は、必要最小限とすること
- (5) 学校の実態に応じ、授業公開を計画的に充実・定着させること



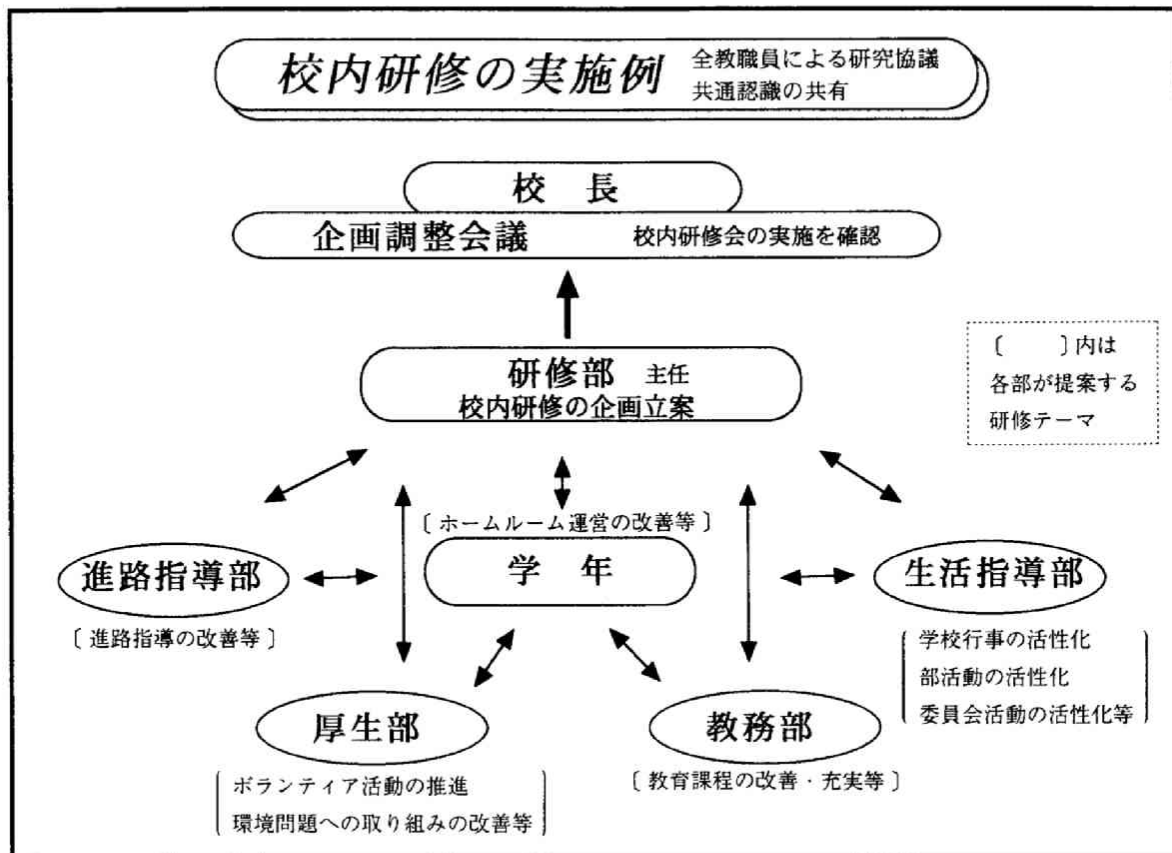
### 3 授業公開を中心とした校内研修の活性化に向けて

学校の教育活動の中核をなすのは、言うまでもなく授業であり、生徒の自己実現と学校生活の充実にとって、授業の改善は不可欠である。

授業公開を中心とした校内研修の活性化を図るためには、前述の課題を一つ一つ解決する必要がある。そこでここでは、各課題ごとに解決の方途を例示し、本章のまとめとする。

#### (1) 校内研修を企画運営する校内組織を作ること

「授業公開を中心とした校内研修」の充実・定着を図るためには、次の図のように研修部が企画立案を行い、校内研修を組織的に運営することが必要である。なお、研修部の設



置が学校規模等の事情により困難な場合には、総合部の設置や既設の部等に研修部の機能を所掌させることが考えられる。

研修部は、各部、各学年等の課題を調査し、校内研修の年間計画を立案する。研修部主任は校長の指導の下、必要に応じて企画調整会議に各回の校内研修の目的と内容を提示し調整を図る。運営については、課題に応じて各部、各学年等と連携して行う。

企画立案に当たっては、開かれた学校づくりの観点から、授業公開を中心とした研修をできる限り取り入れる。その際、各学年や各教科等を分科会として、一定期間内に各分科会において授業公開を中心とした研修を実施し、後日、全教職員による全体会を実施することなどが考えられる。

また、授業公開に当たっての留意点や、学習指導案、資料を提示する場合の形式と提示の仕方等についても、研修部が指示することで授業公開の円滑な実施と授業者の負担の軽減を図る必要がある。

(2) 授業の公開及び校内研修の目的を明確にすること

意識調査から、授業公開の阻害要因として「授業を公開することの目的や参観者の評価の観点明らかでないため強い意抵抗感が生じる」というものが見られた。一方で多数の教員が「授業を公開することの意義」として期待しているものは、大別すると次の3点であった。

- ① 授業改善につながる
- ② 自校の課題の共通理解がもてる
- ③ 生徒理解が深まる

授業公開の充実・定着をはかるためにも、授業公開に際しては、これら3点のいずれか、またはいくつかの事項を「目的」として明確に示すなどの工夫が必要である。

(3) 参観や授業評価の観点を授業者が容易に示せるようにすること

研究授業等における参観や授業評価の観点は、従来は学習指導案中に示されてきたが、この場合、授業者の意図が参観者に明確に伝わりにくいという課題があった。そこでここでは、本報告書のp.17の「生徒による授業評価」を参観者用に用いることを例示する。

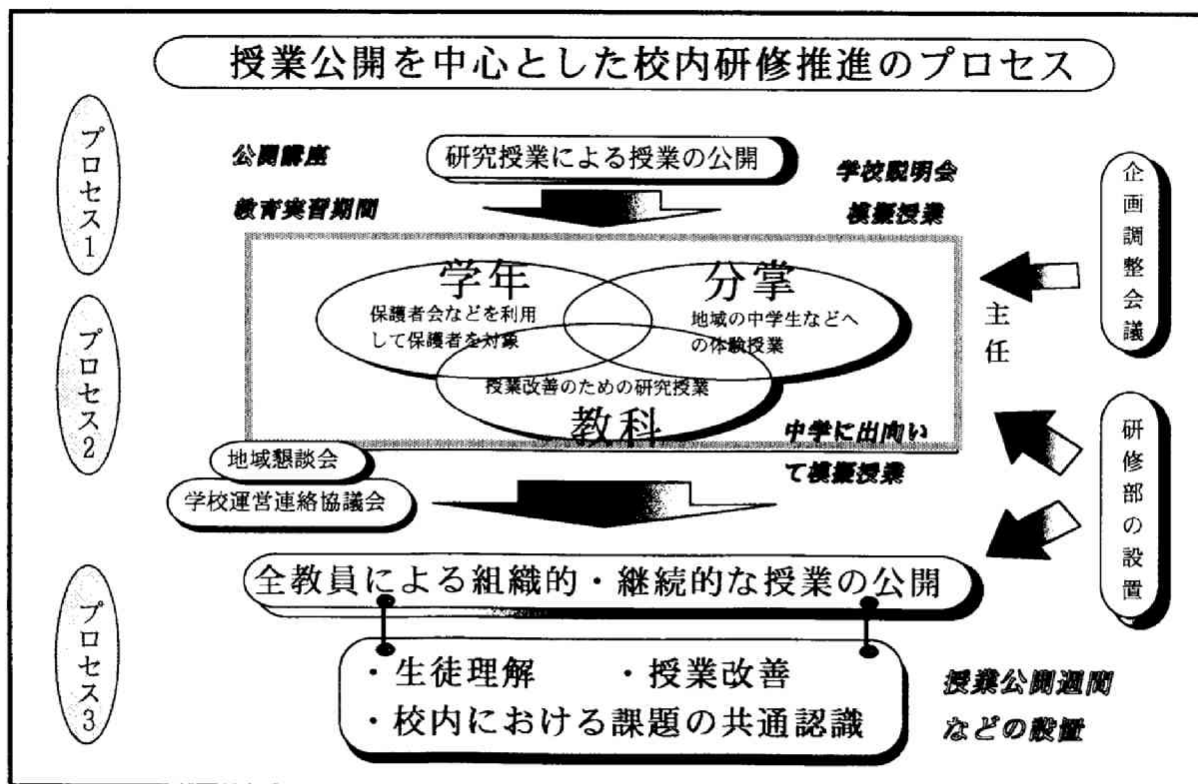
- ① 指導内容について ⇒ ユニットADXYを組み合わせることで評価の観点を作成
- ② 生徒の意欲について ⇒ ユニットDFIJを組み合わせることで評価の観点を作成

(4) 授業公開のための準備を必要最小限とすること

研修授業等においては参観者用の教材や学習指導案の準備に時間がかかることがあり、このことが授業公開の阻害要因となることがある。そこで校内研修においては、公開期間を1週間程度設定することによって「ふだんの授業」を公開し合うよう設定することや、学習指導案を提示する場合は「略案」(本報告書p.13参照)とするよう取り決めを行うことなどが考えられる。

(5) 学校の実態に応じて授業公開を計画的に充実・定着させること

授業公開については、従来からの取組み状況が各学校ごとに異っている。そこで実施に当たっては、これまでの取組み状況等を勘案し、着実に充実・定着が図られるような次のような段階的なプロセスによる年間計画を立案して実施することが考えられる。



〔 授業公開の充実・定着のための段階的導入プロセスの例 〕

	学校の状況	実施の機会等 [担当分掌等]	実施の意義・効果	留意点
プロセス 1	授業公開や教員相互の授業参観は従来あまり行われてこなかった。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教育実習期間に授業を公開し、教育実習生のほか、教員が相互に参観し合う。 [教務部・各教科]</li> <li>・教育研究員や各教科等の研究団体の研究授業を他の教員が参観する。 [教務部・各教科]</li> <li>* 公開講座や体験入学における模擬授業を他の教員が参観する。 [広報部 (教務部)]</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教育実習生の指導に資する。</li> <li>・他の教員の授業公開の糸口となる。</li> <li>・他の教員の授業改善の契機となる。</li> </ul>	
プロセス 2	授業公開や教員相互の授業参観が部分的に実施されていた。	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 保護者会や地域懇談会等の機会に行う保護者対象の授業公開の際に、教員相互の授業参観を行う。 [広報部 (総務部)・学年]</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教員の多面的な生徒理解が深まる。</li> <li>・保護者の多面的な生徒理解が深まる。</li> <li>・保護者と教員との共通理解が深まる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習指導案を提示する場合は略案 (p.13) とする。</li> <li>・必要に応じて生徒による授業評価 (p.17) を取り入れる。</li> </ul>
		<ul style="list-style-type: none"> <li>* 地域の中学生や保護者、中学校教員を対象とした公開授業の際に、教員相互の授業参観を行う。 [広報部 (総務部)・研修部]</li> <li>* 中学校を訪問しての模擬授業の際に、教員相互の授業参観を行う。 [広報部 (総務部)・研修部]</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・中高の連携に資する。</li> <li>・地域の中学生や住民、中学校教員に学校の教育活動を紹介する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習指導案は略案とする。</li> <li>・生徒による授業評価の実施。</li> </ul>
プロセス 3	ある程度、組織的に授業公開や教員相互の授業参観が行われている。	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 教科において研究授業等を行い、他教科の教員も参観する。 [各教科・研修部]</li> <li>・生徒理解の深化や当面する課題の解決のために、学級や学年ごとの授業公開を実施し、研究協議を行う。 [研修部]</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教科全体の共通理解と授業改善を図る。</li> <li>・授業改善の視点を広げる。</li> <li>・教員の多面的な生徒理解が深まる。</li> <li>・自校の教育課題に対する共通理解が深まる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習指導案の提示</li> <li>・生徒による授業評価の実施。</li> <li>・教員相互の授業評価の実施。(生徒による授業評価の項目を用いる)</li> </ul>
		<ul style="list-style-type: none"> <li>* 授業公開日や授業公開週間を設定して全教員が授業を公開する。 [研修部]</li> <li>* 校内研修のテーマに沿って各教科等で授業公開や研究授業を実施し、これを基に研究協議を行う。 [研修部]</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業改善の気運が高まる。</li> <li>・教員の意識改革が進む</li> <li>・自校の教育課題に対する共通理解が深まり、研修が実践的なものとなる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・同上</li> <li>・一般参観者へのシラバスの提示。</li> <li>・授業参観をした保護者や地域の人々による授業評価の実施。(生徒による授業評価の項目を選択して使用)</li> </ul>

【注】 \*印は、地域住民等に授業を公開。

### Ⅲ 中学校と連携し、地域の人々に開かれた学校づくりを推進する学校運営の工夫

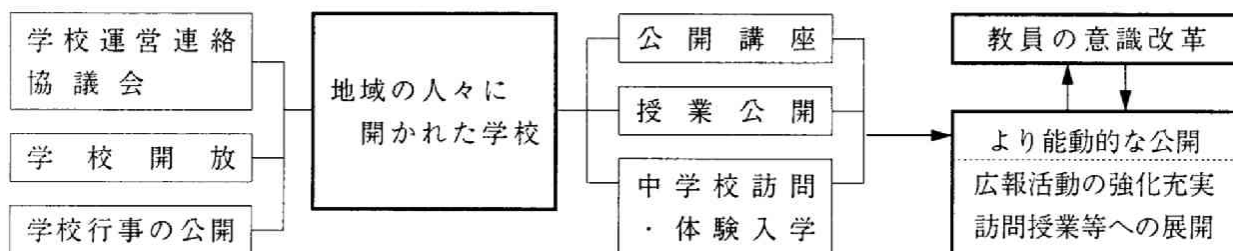
#### 1 はじめに

現在、地域の人々に開かれた学校づくりを推進する取組みとして、公開講座や施設開放、中学生とその保護者対象の体験入学等がすでに多くの都立高校で行われている。また、授業公開週間等を設け、日常の授業を広く一般都民に公開しようとする学校も増えてきた。

しかし、現状では都立高校は地域の人々に対して、まだまだ開かれていないという印象が強い。ふだん都立高校に接する機会の少ない都民にも、地域の学校の実情に触れ、学校の教育活動の内容を知りたいと望んでいる人々が多い。こうした人々にも学校を開かれたものにしていくにはどうしたらよいかを検討する必要がある。また、地域の人々に開かれた学校づくりを考えると、より地域社会と密着した学校であり、しかも常に都立高校に注目している中学校との連携の強化が必要となる。

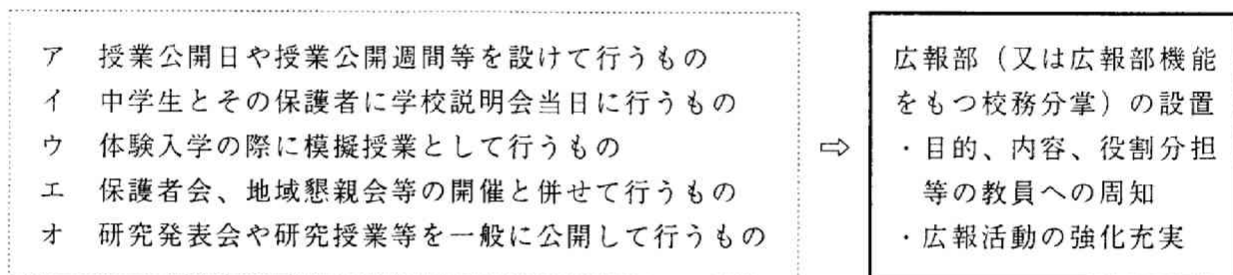
そこで本章では、平成9年度の当部会の提言にある「広報部の設置」（平成9年度報告書 p.9）と「中学校への訪問授業（出張授業）」（同p.22）とに焦点を当て、中学校と連携しつつ、地域の人々に開かれた学校づくりを推進する学校運営の工夫について考察する。

なお、「学校運営連絡協議会」の組織及び運営に関しては「東京の教育21」研究開発委員会（教育課題部会）において研究開発を行ったので、同委員会指導資料集を参照されたい。



#### 2 広報部の設置による授業公開の推進・充実

「開かれた学校」とは、学校での教育活動そのものを開かれた形にすることであり、その中心となるのは授業の公開である。授業公開の方法とそのプロセスについては、前ページの表中にすでに示したが、現在、各学校で行われている授業公開の形態は、概ね以下のようなものであると考えられる。



ところが、こうした授業公開においては、個々の教員がまだ受動的な立場にある場合が少なくない。そこで、授業公開の推進に当たっては、教員がより能動的に参画できるように企画運営を工夫するとともに、組織としての広報活動の強化充実を図る必要がある。具体的には、広報部（又は広報部機能をもつ校務分掌）を設置し、授業公開の目的と内容、教員の役割分担の周知や、地域の人々への広報活動等を行うことなどが考えられる。

また、以下に示したように、高等学校の教員が中学校に出向いて模擬授業を行う「訪問授業」を実施し、より能動的な授業公開の場を設定することによって教員の意識改革を促すことも効果的である。

### 3 能動的な授業公開を目指す「訪問授業」への展開

#### (1) 中学校への「訪問授業」の概要

中学校への「訪問授業」は、平成9年度の当部会が中学校への「出張授業」として提言したものを、本年度、東村山市教員委員会及び東村山市立東村山第五中学校の協力を得て検証授業を行ったものである。以下、その実施に基づいて述べる。

#### 本年度実施した「訪問授業」の概要

##### 1 目的

- (1) 都立高校の授業の一端を中学校の生徒、保護者、教師に体験・参観してもらうことを通して、都立高校の教育内容を積極的に紹介する。
- (2) 中学校の進路指導の充実に資する情報を提供し、中学校との連携の強化を図る。

##### 2 日時

平成10年10月23日（金） 13：20～15：20（第5校時、第6校時）

##### 3 対象

第2学年生徒 132名（4学級）

##### 4 授業者

都立高等学校教諭（本部会教育研究員） 5名

##### 5 内容

高等学校における学習内容について、模擬授業を通して分かりやすく紹介する。  
（本事例では、国語、地理・歴史、数学、商業、工業の5教科を実施）

##### 6 方法

生徒は、事前に配布したシラバス（p.12参照）を参考にして、興味・関心のある教科を二つ選択し、第5校時と第6校時に1教科ずつ模擬授業を体験する。

#### 期待される成果

「訪問授業」においては、上記の目的以外に次のような成果を期待した。

- (1) 従来の体験授業と異なり、高校側から中学校に出向いて模擬授業を行うことで、教育活動を積極的に公開し、開かれた学校づくりを推進していく姿勢を、学校内外に広く示すことができる。
- (2) 都立高校の教育活動を紹介し、開かれた学校づくりに参画する活動を通して、個々の教師の意識改革を促すことができる。

#### (2) 「訪問授業」実施までの準備過程

訪問授業の実施には中学校との連携が最も重要である。実施に当たっては、数校（学区単位など）が合同で行う場合と1校が単独で実施する場合とが考えられるが、いずれの場合もできる限り早めの準備を心がけたい。

なお、中学校では「訪問授業」を進路指導の一環として位置付けるため、対象学年については志望先が具体化してくる第3学年や中学校での指導が初期段階にある第1学年よりも、第2学年が適当である。

次に、各校が「訪問授業」を実施するまでのモデルプランを示す。

時期	高等学校側の準備	中学校側の準備
実施の前年度 又は 年度当初	<ul style="list-style-type: none"> <li>・校長から中学校への打診</li> <li>・実践例（本事例等）の提示</li> <li>・実施内容及び時期の提案</li> <li>・教育課程への位置付け</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・実施についての検討</li> <li>・区市町村教育委員会へ相談</li> <li>・実施の決定</li> <li>・教育課程への位置付け</li> </ul>
実施の 2か月前	<ul style="list-style-type: none"> <li>・実施科目と授業者の選定</li> <li>・生徒向けシラバスの提案と学習指導案（略案）の提示（下表および右ページ参照）</li> <li>・実施案の修正</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・内容の検討及び改善案の提示</li> <li>・生徒への予告</li> <li>・保護者等への案内</li> </ul>
実施の 1か月前	<ul style="list-style-type: none"> <li>・必要に応じて授業評価票や参加者向けのアンケート等を作成</li> <li>・校内外への案内 【中高打合せ】</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業クラスの編成</li> <li>↓</li> <li>・高等学校の担当者へ連絡</li> </ul>
実施の 1週間前	<ul style="list-style-type: none"> <li>・参観者用略案と受付簿等の作成 【中高打合せ】</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業施設等の確認</li> <li>・生徒への確認</li> </ul>
実施当日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・参観者用案内の掲示</li> <li>・生徒の出欠確認と報告</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒への指示</li> <li>・生徒の学習状況の確認</li> </ul>

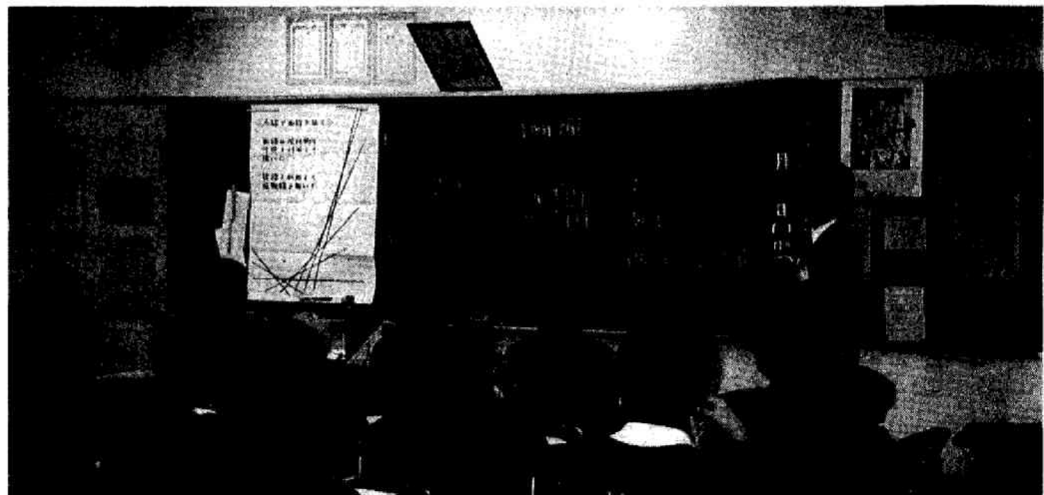
今回の訪問授業で中学生に事前に示した「シラバス（授業概要）」及び「選択希望調査票」は次のとおりである。

教科	単元名	内 容	選択希望○	
			5限	6限
国 語	古典文学の楽しみ	高等学校では「古典」の分野も詳しく学習します。今回は古典文学の楽しい世界の一部を紹介します。		
地理 ・歴史	コショウの世界史	あれ!? 500年前の世界地図にはアメリカがない。ラーメンにかけるコショウが地図を変えたとしたら。		
数 学	放物線の不思議	投げたボールはどう飛ぶか。ボールが飛んだ道筋の不思議な性質をさぐる楽しい数学。難しい計算なし。		
工 業	乾電池で見る「工業」	乾電池で手はあたたまるか。乾電池を使った実験を通して、身近な「工業」の世界にふれてみよう。		
商 業	「商業」という世界	何を、いつ、どれだけ、どのようにして売り買いするか。ゲーム形式でのぞく「商業」の世界。		

「シラバス」の提示後、中学校に提示した学習指導案（略案）の一つは以下のとおりである。

(A 4判1枚)		数学科「訪問授業」学習指導案（略案）	
		対象学級 第2学年1組～4組	
		授業者 ◇◇◇（▽▽高等学校教諭）	
1 単元名 放物線の不思議			
2 単元（本時）の目標			
① 体験学習を通して都立高等学校の普通科における学習の一端を知る。			
② 放物線という身近な曲線の性質を調べることにより、数学的な考え方のおもしろさを知り、高等学校における数学の学習に興味・関心をもつ。			
3 本時の指導（1/1）			
主な学習活動		指導上の留意点	
1 本時の目標を知る。		・授業のあらましを説明する。	
2 放物線の描き方を考える。		・スポンジボールなどを使い、物の飛ぶ法則や曲線の形について興味をもたせる。	
3 折り紙を使って放物線を描く。		・身近にある放物線を紹介し、それをどのように描くかを考えさせる。	
4 放物線の性質を調べる。 （マス目を数えてx座標とy切片の値を表に記入する。）		・放物線の描き方を紹介したうえで、実際に曲線を折り紙で作らせ、関心を深める。また、なぜ描けるのかという興味をもたせたいうえで説明を加える。	
5 規則を発見する。		・配布プリントにより、曲線上の2点のx座標と2点を結ぶ直線のy切片の値との関係を表にして調べさせる。	
6 結果のまとめ		・表にした関係から一つの規則を発見させ、解説を加える。	
		・本時において用いた数学的な考え方についてまとめ、その有用性を示す。	
		・本時が都立高校の普通科における授業の一角であったことを伝え、課程や学科の特色、学年別の学習状況を簡単に紹介する。	

訪問授業の様子

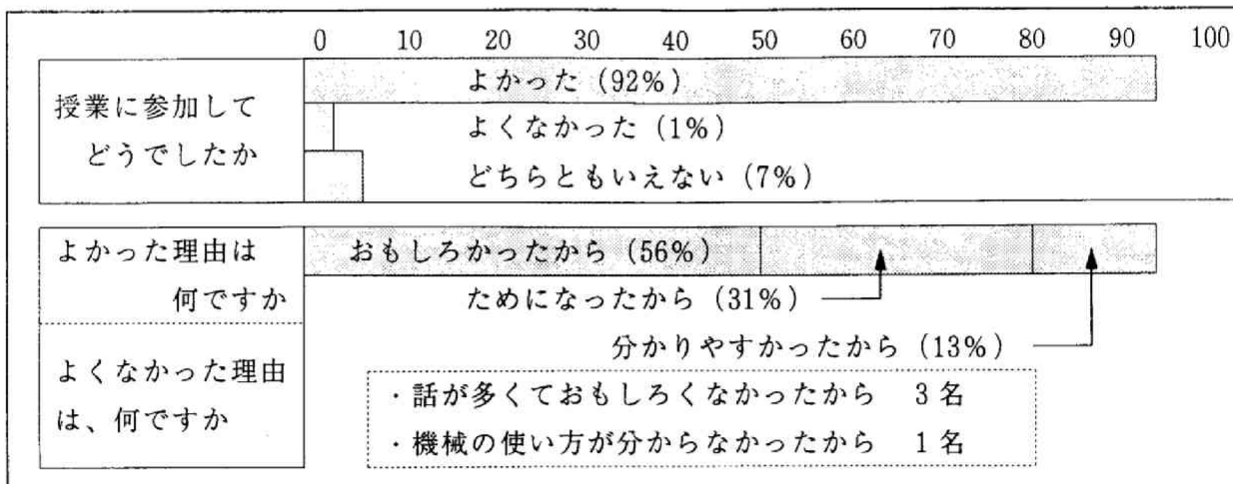


(3) 「訪問授業」のまとめと考察

「訪問授業」が中学生や参観者にどのように受け止められ、また授業者の教員の意識が実施後どのように変化したか、実施日に行ったアンケート調査の結果等を基に考察する。

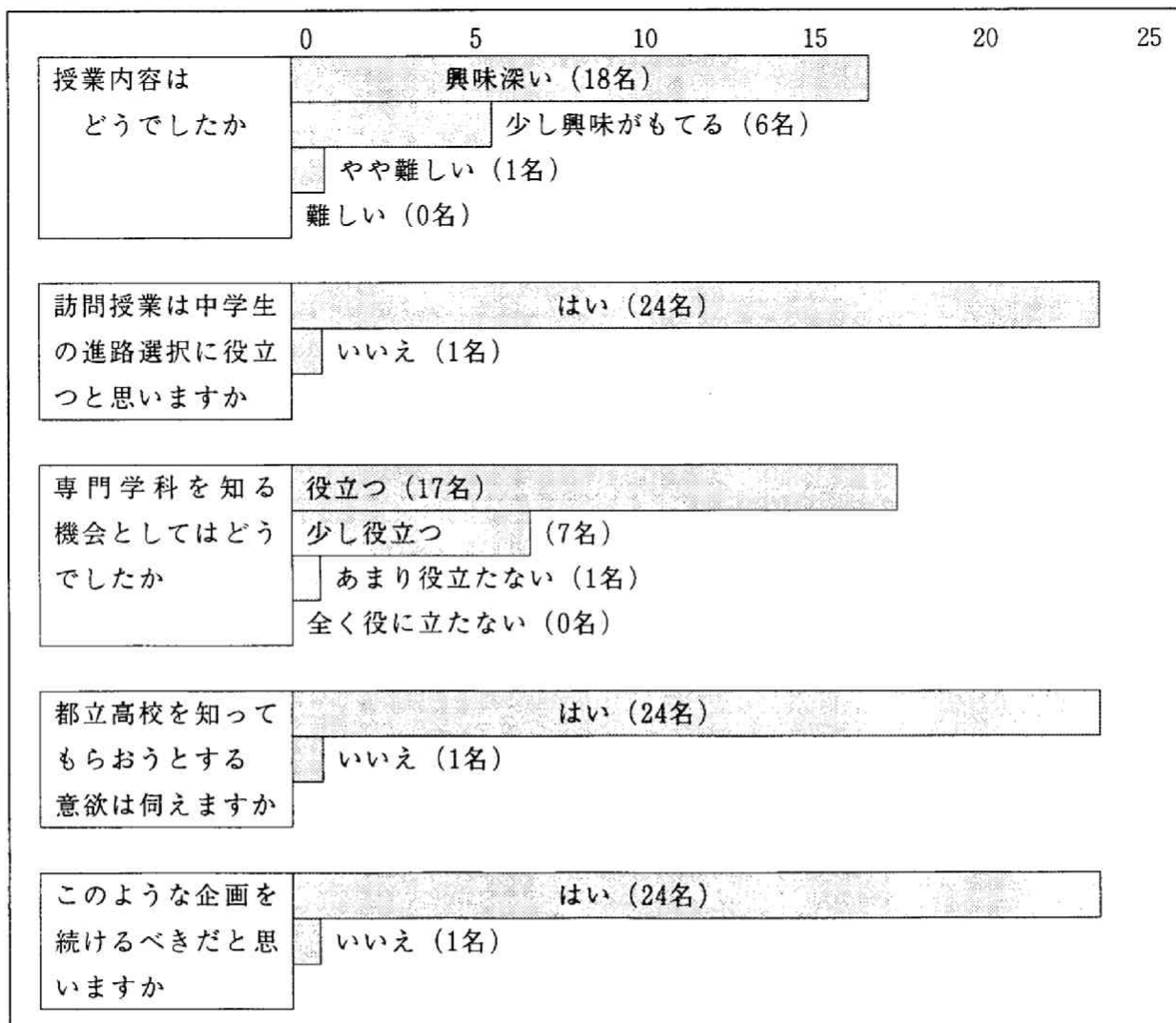
<中学生へのアンケート>

(延べ259名 回収率98%)



<参観者（都民、保護者、中学校の教員）へのアンケート>

(25名 回収率56%)





#### ア 中学生へのアンケートから

調査結果からは、中学生が各教科の内容に興味をもって取り組んでいたことがうかがえる。自由記述の項目にも、「もう少し長くやりたかった」「ほかの教科もやりたい」「もっと回数を増やしてほしい」などの記述があり、また、授業後に質問にくる生徒も見られた。「分からない」という回答はコンピュータの操作に関する1件で、授業の内容は概ね中学生に理解できるものであったと考えられる。これらのことは、例えば数学で方程式や複雑な分数計算を用いないよう指導計画を立てるなどの工夫が成果を上げたものと思われる。

「おもしろくなかった」という回答は、実技をとまなう授業と講義形式の授業とを選択した生徒のもので、どの教科にも体験的な活動を取り入れる必要があることを示している。

#### イ 参観者へのアンケートから

本実践事例においては、「訪問授業」の意義については大半の理解が得られ、授業の内容や開かれた学校に対する意欲もほぼ評価されたものと思われる。専門学科を知る機会として「少し役立つ」が7名あったことは、「訪問授業」では施設・設備の見学ができないことに関係していると考えられる。専門学科において「訪問授業」を実施する際には、別途、施設見学等の機会を設定することが必要である。

また、各項目の否定的回答には、中高連携では生徒の問題意識や入学選抜制度の在り方についてまず取り上げるべきである旨の意見が付してあった。「訪問授業」においては、模擬授業のみではなく、様々な教育課題について中学校と高等学校の教員が研究協議を行う場を併せて設定することが考えられる。

#### ウ 授業者の感想から

授業者に行った自由記述によるアンケートには、「学校のPRではなく、授業を通して高校への関心を高め、有益な情報を提供したという実感があった」「開かれた学校づくりは日常の取り組みの延長であり、特別なものではないことが分かった」「中学校の状況に直接触れ、中高連携の必要性を強く自覚した」「高校の学習内容を中学生に分かりやすく紹介する工夫の中に日常の授業に還元できるものが多くあった」等の記述が見られた。

授業者は教育研究員であり、開かれた学校づくりについての課題意識はそれぞれ十分にもっているつもりであった。しかし、実際に準備や当日の模擬授業に携わる中で、日頃の取り組みについて反省させられたり、自分が教員として都立高校の教育活動について広く伝える使命をもつことを改めて実感したりする場面が数多くあった。

都立高校の教員がこちらから出向いて行う「訪問授業」では、学校説明会や体験入学等と比べて、教員自身が能動的にはたらきかけなければならないことが多いため、教員の意識改革への効果も大きいものとする。

#### (4) 「訪問授業」の今後の課題

区市町村教育委員会等にはたらきかけて地域の各中学校で「訪問授業」を定期的実施するなど、普及と定着の方法を工夫する必要がある。

また、広範囲の学区をもつ都立高校としては、この方式を公開講座に取り入れ、地域の人々の出かけやすい場所や福祉施設等に赴いて公開講座を開講する「訪問講座」等への展開も検討する必要がある。

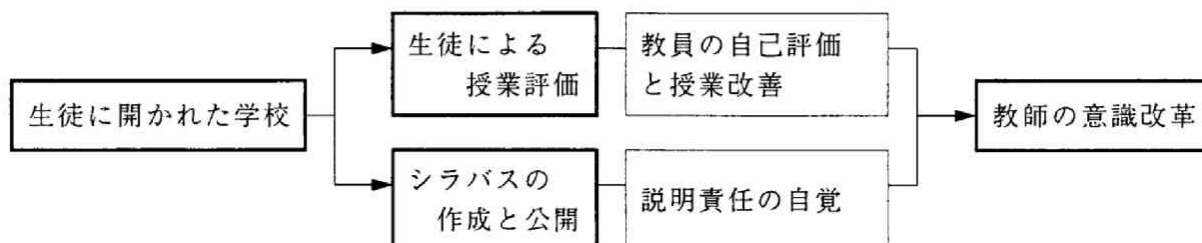
## IV 生徒に開かれた学校づくりを推進する学校運営の工夫

### 1 はじめに

今日、生徒に開かれた学校づくりを推進するための様々な工夫が学校に求められている。本部会では、そうした工夫の中で「生徒による授業評価」と「シラバスの作成と公開」とに着目して研究を進めた。

「生徒による授業評価」は、生徒の学校生活の充実と直接かかわるものであり、また教員の意識改革とも密接にかかわっている。ここでの授業評価は、よりよい授業を創造していくための情報を収集・整理・分析し、それを授業改善に役立てるまでの過程全体を意図している。具体的には、生徒が教員の指導をどのように受け止め考えているかの理解であり、その理解を基にした教員自身の反省と改善である。

また、「シラバスの作成と公開」は、上記の授業改善の過程の中に位置付けられるものであり、現在、学校に求められている情報公開と説明責任の遂行を具体的に推進するためにも不可欠なものである。



### 2 「生徒による授業評価」の作成と実施

「生徒による授業評価」は、すでに平成7年度「東京都公立高等学校 学校評価基準」において各都立高等学校に示されているが、組織的計画的にはあまり実施されてこなかった。

そこで本部会においては、より活用しやすい「生徒による授業評価票」の作成を目指した。作成に当たっては、上述の「学校評価基準」及び東京都立教育研究所「授業研究の方法」（昭和57, 58年度）を参考にしてアンケート調査を実施し、教員の授業に関する課題を収集して、KJ法により分析・類型化して評価項目を検討した。また、実施の方法については他府県や私立学校等での先行事例を参考とした。さらに、教員研究員所属校12校において実際に評価を行い、実施教員や生徒の意見を踏まえて改良を重ねた。

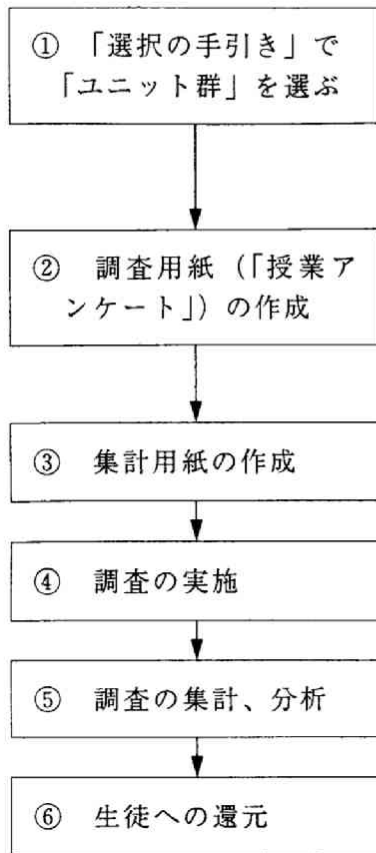
新しい「生徒による授業評価票」の特色は、次のとおりである。

- ① 5分で作成、5～10分で実施可能
- ② 目的に合わせて、のりとはさみで「ユニット」を貼り合わせて作成
- ③ 集計は○を付けるだけ
- ④ 保護者や教員による授業評価にも利用可能

- ⑤ 「ユニット選択の手引き」で利用目的別の質問が簡単に決まる。
- ⑥ 平易な質問項目で生徒への負担が少ない（中学校でも利用可能）。
- ⑦ 「普通」のない四者択一式で生徒の積極的な意見を反映できる。

以下に「ユニット選択の手引き」「調査票」「集計用紙」を複写して活用できるよう掲載した。

(1) 「生徒による授業評価」の実施の手順

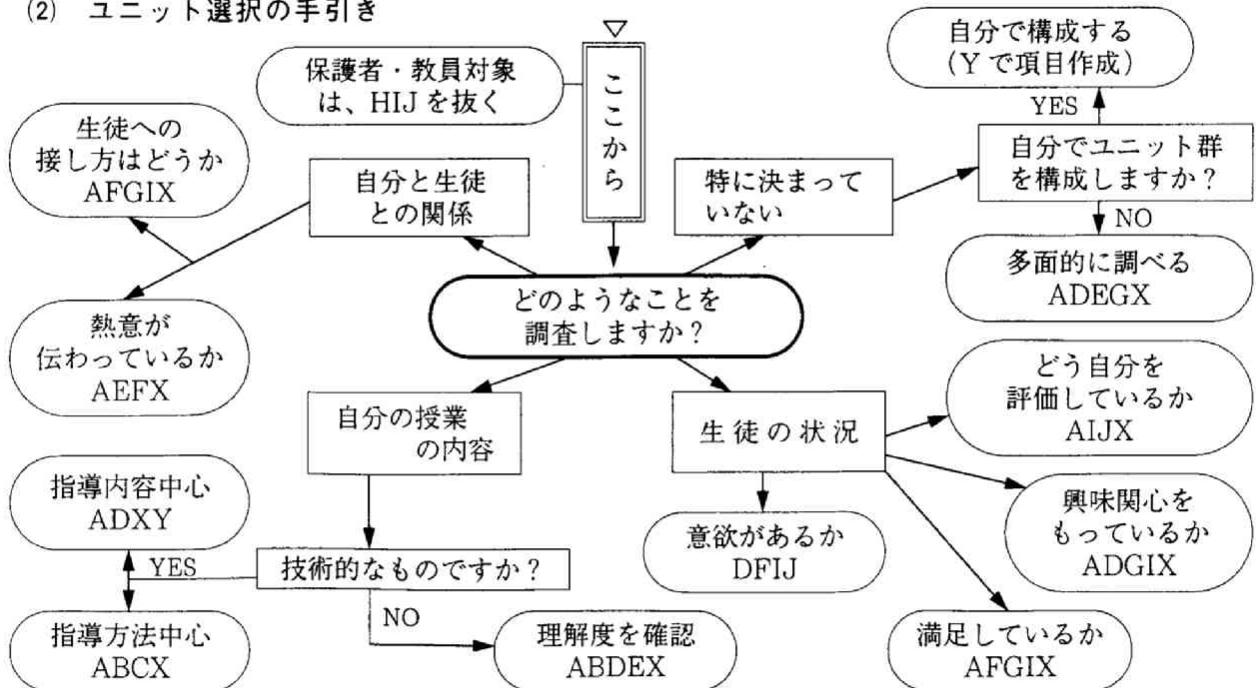


- ① 「ユニット」とは分野ごとに分けた質問項目です。下の「ユニット選択の手引き」にそって、「ユニット群」を選んでください。  
また、自分で任意のユニットを選ぶことや、「ユニットY」で独自の質問項目を作成することもできます。
- ② p.18～19の「授業アンケート」を複写します。選んだユニットの質問と回答の部分（太線囲い）を切り取り、調査用紙（「授業アンケート」）を作成します。（このとき実技科目では、※印のある項目は除きます。）
- ③ p.20の集計用紙をA3判に拡大複写し、作成した調査用紙の質問の部分を取り取って中央に貼ります。
- ④ 調査用紙の上部にある、アンケートの目的や記入の方法等を簡単に説明してから始めてください。
- ⑤ 目盛りにそって、アは〇〇、イは〇を右側につけ、ウは〇、エは〇〇を左側につけます。
- ⑥ 指導内容・方法の改善、指導計画やシラバス（p.22）への反映などが考えられます。また、集計用紙を縮小複写して生徒に提示した実践例もあります。

【その他】

- ・無記名の調査ですが、「生徒の状況」等の調査では記名も考えられます。
- ・この調査では、どの実施例でも回答に否定的評価があったことが報告されています。

(2) ユニット選択の手引き



このアンケートは、授業をより良いものにするために、みなさんの意見を聞くものです。成績には関係ありません。次の質問について、当てはまる答えを一つ、ア イ ウ エ で回答に記入して下さい。感想の欄も自由に書いてください。

ユニット	視点	質問	ア イ ウ エ	回答
指導方法 1	(1) 説明の仕方	先生の説明は分かりやすいですか	ア分かりやすい イどちらかといえば分かりやすい ウどちらかといえば分かりにくい エ分かりにくい	
	(2) 板書の仕方	黒板に書いた内容は整理されていますか	ア整理されている イだいたい整理されている ウあまり整理されていない エ整理されていない	
	(3) 話し方	先生の話し方は聞き取りやすいですか	ア聞き取りやすい イどちらかといえば聞き取りやすい ウどちらかといえば聞き取りにくい エ聞き取りにくい	
	(4) 発問	質問の意味は分かりやすいですか	ア分かりやすい イどちらかといえば分かりやすい ウどちらかといえば分かりにくい エ分かりにくい	
指導方法 2	(1) 時間の与え方	ノートを取る時間や練習する時間は十分ですか	ア十分ある イどちらかといえばある ウあまり十分ではない エない	
		考える時間は十分にありますか	アある イどちらかといえばある ウどちらかといえばない エない	
		授業の始まりと終わりの時間は守られていますか	ア守られている イだいたい守られている ウあまり守られていない エ守られていない	
(2) 授業の流れ	授業の進め方は分かりやすいですか	ア分かりやすい イどちらかといえば分かりやすい ウどちらかといえば分かりにくい エ分かりにくい		
指導方法 3	(1) 生徒主体	自分で考えながら学習する授業でしたか	アそうである イどちらかといえばそうである ウどちらかといえばそうではない エそうではない	
	(2) 教材の提示	配られた資料などは役に立ちましたか	ア役に立った イだいたい役に立った ウあまり役に立たなかった エ役に立たなかった	
	(3) 視聴覚教材	ビデオ・スライド・写真などが効果的に利用されていましたか	アそうである イどちらかといえばそうである ウどちらかといえばそうではない エそうではない	
	(4) 予習・復習	予習・復習をするところや仕方を教えてくれましたか	ア教えてくれた イだいたい教えてくれた ウあまり教えてくれなかった エ教えてくれなかった	
内容	(1) 進度	授業の進む速さはどうでしたか	アちょうど良かった イまあまあ良かった ウあまり良くなかった エ良くなかった	
	(2) 難易度	授業内容の程度はどうでしたか	ア分かりやすかった イどちらかといえば分かりやすかった ウどちらかといえば分かりにくかった エ分かりにくかった	
	(3) 興味関心	興味や関心のもてる内容の授業でしたか	アそうである イどちらかといえばそうである ウどちらかといえばそうではない エそうではない	
	(4) 学習の目標	授業の目標はわかりましたか	ア分かった イどちらかといえば分かった ウどちらかといえば分からなかった エ分からなかった	
取り組み方	(1) 熱意	先生は熱心に教えてくれましたか	ア熱心だった イどちらかといえば熱心だった ウどちらかといえば熱心でなかった エ熱心でなかった	
	(2) 準備	先生は授業の準備を十分にしていますか	アしていると思う イどちらかといえばしていると思う ウどちらかといえばしていないと思う エしていないと思う	
	(3) 対応	生徒一人一人に合わせて説明をしてくれますか	アしてくれる イどちらかといえばしてくれる ウどちらかといえばしてくれない エしてくれない	
	(4) 生徒の活用	生徒が自分の考えや意見を十分に言える授業ですか	アそうである イどちらかといえばそうである ウどちらかといえばそうではない エそうではない	

【注】※印の項目など、「体育」等の科目では使用しないものがある。

ユニット	視点	質問	ア イ ウ エ	回答
F 生徒への接し方	(1) 公平	先生は生徒一人一人に公平に接していますか	ア公平である イどちらかといえば公平である ウどちらかといえば公平でない エ公平でない	
	(2) 意見	先生は生徒の考えや意見を大切にしてくれますか	ア大切にしている イどちらかといえば大切にしている ウどちらかといえば大切にしていない エ大切にしていない	
	(3) 連帯感	生徒が共に学び、教え合うような授業ですか	アそうである イどちらかといえばそうである ウどちらかといえばそうではない エそうではない	
	(4) 支援	先生は生徒を励ましてくれますか	アしてくれる イどちらかといえばしてくれる ウどちらかといえばしてくれない エしてくれない	
G 満足度	(1) 楽しさ	授業は楽しかったですか	ア楽しかった イどちらかといえば楽しかった ウどちらかといえば楽しくなかった エ楽しくなかった	
	(2) 好奇心	知りたいことが分かる授業でしたか	アそうである イどちらかといえばそうである ウどちらかといえばそうではない エそうではない	
	(3) 役に立つ	この授業はあなた自身の役に立つと思いますか	ア役に立つ イどちらかといえば役に立つ ウどちらかといえば役に立たない エ役に立たない	
	(4) 期待	やる気がおこる授業でしたか	アそうである イどちらかといえばそうである ウどちらかといえばそうではない エそうではない	
H 成績評価	(1) 評価方法	何をもとに成績をつけているか説明してくれましたか	ア説明してくれた イだいたい説明してくれた ウやや説明不足である エ説明不足である	
	(2) 評価基準	評価の段階の基準は知っていますか	ア知っている イだいたい知っている ウあまり知らない エ知らない	
I 自己評価	(1) 参加	積極的に参加しましたか	ア参加した イどちらかといえば参加した ウどちらかといえば参加しなかった エ参加しなかった	
	(2) 予習・復習	予習・復習はしましたか	アした イどちらかといえばした ウどちらかといえばしなかった エしなかった	
	(3) 授業態度	おしゃべりなどをしないでまじめに授業を受けましたか	ア受けた イどちらかといえば受けた ウどちらかといえば受けなかった エ受けなかった	
J 自己評価	(1) 聴取	先生の話をよく聞きましたか	ア聞いた イどちらかといえば聞いた ウどちらかといえば聞かなかった エ聞かなかった	
	(2) 記録※	ノートをきちんと取りましたか	アとった イどちらかといえばとった ウどちらかといえばとらなかつた エとらなかつた	
	(3) 思考	授業中の課題や問題について考えることができましたか	アできた イどちらかといえばできた ウどちらかといえばできなかつた エできなかつた	
X 自由記述 1	完全自由記述	授業についてあなたの感想があれば書いてください		
Y 自由記述 2	項目設定型自由記述	次の項目についてあなたの感想・要望を書いてください		

【注】 H, I, J の項目は、保護者や教員対象のアンケートには用いない。

生徒による授業評価 集計用紙

\* A 4判をA 3判に複写 (×141%)

年 組

50 40 30 20 10						質 問	10 20 30 40 50											
ウ○			エ○○				ア○○			イ○								
						ここに質問項目を貼る												

備考 (自由記述など)

### (3) 「生徒による授業評価」の実施状況と考察

生徒による授業評価を教員研究員の所属校12校16学級で実施し、実施状況についての調査を行った。以下はその報告と考察である。

#### ア 実施の状況について

作成に要した時間は5分程度、実施時間は5～10分であった。短時間で行え、生徒に負担の少ないものとなった。集計時間は15～30分で生徒数や自由記述の処理の仕方で異なった。評価票の作成に関する感想では、「ユニット選択の手引きから多岐にわたる調査が可能」が多く見られた。自分の目的に合った授業評価票が簡単に切り貼りで作れるといった利便性を裏付けた結果となった。また準備に手間がかからないことも評価された。

集計に関しては、「中間がない回答方法なので生徒の意見がはっきりしてよい」「集計用紙がグラフ形式になっているので、結果が視覚的で、比較の見やすい」「集計結果によりクラス全体の様子が分かりやすい」といった感想とともに、「集計用紙からは生徒一人一人の様子がつかみにくい」といった指摘もあった。この点については記名させて回収し、生徒個々の回答用紙を参照する方法が考えられる。

#### イ 調査の分析結果からの考察

実施教員からの感想として「生徒とのコミュニケーションが深まる一つのきっかけになる可能性がある。生徒から率直な意見が出される」「自分の生徒に接する態度が肯定的に評価されたことは、正直言ってうれしく、生徒たちにより分かる授業を、という意欲がわいたきた」など、肯定的な意見が多く寄せられた。生徒からの評価を受ける機会が今までほとんどなく、実施してみると思った以上に役に立つと受け止められたようだ。

授業評価の実施は、生徒にとって次のような利点があると考えられる。

- ・教員に直接授業についての意見を伝えることができる。
- ・教員が自分の授業を改善しようとしている姿を見ることで信頼感と期待感がもてる。
- ・自分の学習状況について振り返る機会となる。

また、教員にとっては次のような利点が上げられる。

- ・生徒からの直接的な意見を聞き、授業改善に生かせる。
- ・生徒の学習実態を知ることができる。
- ・生徒との信頼関係を深めることができる。

さらに、高知県等での実践事例から、「生徒による授業評価」を学校として実施した場合、次のような成果が上がるのが期待できる。

- ・授業改善のための校内研修の効果的な資料となる。
- ・複数の教員がいくつかの学級で実施し、比較検討することで生徒理解の深化につながる。
- ・一人一人の生徒の意見を大切にする学校の姿勢や開かれた学校づくりを推進する意欲を学校内外に示すことができる。

今後は、「生徒による授業評価」の普及に努めたい。

### 3 シラバスの作成と公開



#### (1) シラバスの作成と公開の意義

シラバスは、学年ないし学期中の授業の計画や内容の概略を示したもので、ここでは指導計画とほぼ同義である。各学校の教育目標や生徒の実態を視野に入れ、各単元の学習内容や要点、提出物、小テストなどの指示を指導計画として示したものである。

シラバスを学期の初めなどに生徒へ配布することは、生徒への情報公開と説明責任（アカウンタビリティ）の観点からも、また、生徒による授業評価を授業の改善に役立たせるためにも必要なことである。

#### (2) シラバスの作成例

数学 I 2次関数 1学期

時期	学 習 の 内 容	学 習 項 目 (教 科 書)	テスト・提出物
4月	物を投げたときの曲線（放物線）はどんな形か調べよう	2次関数とそのグラフ (p.2~3) $y = ax^2$ のグラフの平行移動 (p.4~12)	 小テスト レポート提出
5月	曲線の特徴を調べよう 方眼紙の上に曲線をかいてみよう 放物線を式で表そう		
中間 考查			
6月	投げ上げられたボールはどこまで高く上がるのだろうか	2次関数の最大値・最小値 (p.20~28)  2次関数のグラフと2次方程式 (p.30~42)	小テスト レポート提出 
期末 考查	投げたボールはどこに落ちるのだろうか  投げたボールが届くのはどの範囲だろうか		

生徒による授業評価を授業改善に役立てるためには、まず、授業の目標を明確にし、シラバスを作成し、生徒に配布しておき、学習指導のふし目で、評価の対象を明確にして、生徒による授業評価を行う。そのとき、生徒による授業評価の目的と、その結果の扱い方、生徒へのフィードバックの仕方を、生徒に明確に示し、生徒へのフィードバックは、生徒による授業評価の集計表を生徒に見せるなどして、迅速に行うようにする。

また、日頃から生徒との信頼関係を大切にしながら、生徒に評価力を身に付けさせることも必要である。項目設定型の自由記述欄を利用すれば、学習内容に関わる生徒による授



業評価も行うことができる。

そのようにして、生徒による授業評価から得られたフィードバック情報と、教師自身が得た授業評価情報を基に、授業の改善を決定し、次のシラバスを作成していくのである。授業評価については、一面的にならないように、生徒による授業評価以外の複数の方法を併用するとともに、生徒による授業評価のデータの蓄積をはかり、分析法を確立することが必要である。

#### 4 授業評価とシラバスによる教員の意識改革

授業評価は、よりよい授業を創造していくために、フィードバック情報をどのようにして収集し、整理・分析して生かしていくかというプロセス全体のことである。それは、授業の指導目標に対する生徒の到達度や変容の度合いを知るために行い、その結果によって指導法の工夫・改善をし、さらに、より生徒の実態に沿った指導目標の設定を図ることが目的である。

授業評価により授業を改善するためには、まず授業の指導目標や内容、教材やその配列、説明や発問などの教師の働きかけと生徒の反応・思考活動などを検討し、明らかにした上で、授業の指導計画（指導案）を作成することが重要である。指導案は授業の仮説であり、授業評価は、指導案の内容が実際の授業でどのような働きをしているかを分析するための資料であると言われる。授業の分析結果を基に、次の授業を改善していくのである。

その流れは、

指導計画（指導案）作成→授業実践→授業評価→分析→授業改善 となる。

生徒による授業評価を取り入れることにより、生徒の意見が授業の改善に生かされると、生徒の学習意欲が高まり、教員と生徒の人間関係も深められるとともに、どんなベテランの教師でも、自分の授業の改善点に気づくなど、教師の意識改革が図られ、学校全体の活性化が促進されると考えられる。学校がこのような姿勢を持つことは、開かれた学校づくりへの努力を内外に提示することになり、大きな効果が期待できる。

今後の課題としては、当面は、実施教員が個人的に結果を利用するのを原則とし、学期末等での実施を想定しているので、特定の時期に多くの教員が実施することが考えられる。その際、特定の学級にいくつものアンケートが集中しないような配慮が必要である。また、生徒による授業評価を、教員個人の自主的な取り組みから、教科全体または学校全体の取り組みとして実施する場合の具体的な活用については、さらに研究を進める必要がある。

生徒による授業評価を生徒に開かれた学校づくりに、真に生かすためには、生徒による授業評価の結果を、授業やシラバスの改善に役立てることが必要であり、そのための方法を確立することも課題である。

## V まとめと今後の課題

現在の都立高校を「開かれた学校」とするための学校運営の在り方を検討するに当たり、まず学校自身がつ力を生徒や保護者、地域の人々に対して向けることにより、都立高校は大きく開かれた姿となると考えた。そのためには一人一人の教員が、授業や研修、地域の活動等に対する従来の考え方や意識を改革するとともに、積極的かつ継続的に学校改革に取り組める新しい学校組織を作ることが必要である。このことは、教員一人一人が常に教育活動の原点である授業の在り方及び内容に課題意識をもつことであり、さらにより良い教育活動が展開できる学校組織を目指す学校運営に参画することで実現されると考えた。

「Ⅱ 教員相互が開き合う学校づくりを推進する学校運営の工夫」では、教員が授業公開を中心とした校内研修を通して意識を改革し、保護者や地域の人々に対して、学校の教育活動を公開していくようになるための校内組織の改革と授業公開の推進のためのプロセスについて研究した。「研修部」を新設し、教員の授業公開に対する意識調査を基に、研修部が各分掌と連携を取りながら段階的に授業の公開及び校内研修の充実と定着を進める組織の具体案を示した。

「Ⅲ 中学校と連携し、地域の人々に開かれた学校づくりを推進する学校運営の工夫」では、従来の学校公開と異なり、教員が積極的に出向いて行くことで、地域社会に向けて開かれた学校とするための研究を行った。訪問授業として中学校に赴き、中学生やその保護者あるいは地域の人々が、模擬授業を通して都立高校の教育活動を体験する機会を設定した。参加者からのアンケートによる意見を集約し、より能動的な授業公開の在り方について考察した。

「Ⅳ 生徒に開かれた学校づくりを推進する学校運営の工夫」では、生徒に向けて開かれた学校とするための学校改革をいかに行うかに視点を置いて研究を行った。生徒からの客観的な授業評価を得られるアンケート形式の評価票の内容研究及び作成を行い、広く活用が図られるよう、評価票の作成から集計、分析までの資料をすぐに利用できる形で提示した。

本報告書に示したような、身近な実践であっても、一つ一つの積み重ねによって、各学校の教員が従来の意識を少しずつ改革し、学校改革に積極的に参画して、開かれた学校づくりを推進する学校運営が各学校において実現されれば、都立高校全体としても広く都民に開かれた存在となると考える。

今後の課題としては、「学校運営連絡協議会」等における学校評価をどのように教員の意識改革につなげるか、生徒の学校外における活動の単位認定対象の拡大にともない、生徒の主体的な学校外の活動と開かれた学校づくりとをどのように関連させて推進するかなどが挙げられる。

おわりに、本部会が着目した教員の意識改革は、あくまでも一人一人の教員の内部でなされるものである。そのためには、それぞれの教員が日々の教育活動を振り返るとともに、身近な人々の評価に真摯に耳を傾けることが必要である。本研究における実践が契機となり、各学校での新しい取り組みがなされるよう期待するとともに、今後とも研究を継続し、その具体的成果を生徒に還元していきたいと考えている。